

ほんちょうぐんきこう

#34 本朝軍器考

作者：新井白石（あらい・はくせき 1657-1725）

成立：宝永6年（1709） 刊行：元文5年（1740）

📖 解題

■ 内容

古代から江戸幕府期までの軍器の制度構造・沿革について、確実な文献・記録を元に考証したもの。

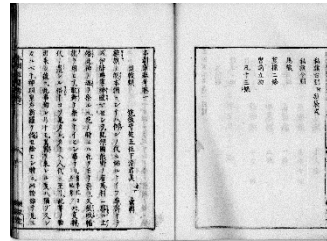
『新井白石日記』によると宝永3年（1706）に將軍の世子に定まった徳川家宣より白石に「本朝軍器考」を近日中に著作するようとの意向が伝えられたとの記述があり、同6年付けの朝倉景衡による序があるため、この間に成立したものと考えられている。

儀式関係以外の軍器を旗幟類、金鼓類、節鉞類、弓矢類、弩炮類、火器類、矛槍類、劍刀類、甲冑類、鹵盾類、帷幕類、鞍轡類の12項目に分け、全151条にわたって、それぞれの沿革・特徴を説いている。元文開版のものには白石の義弟である朝倉景衡が編集した『本朝軍器考』の図解である『本朝軍器考集古図説』が付された。

当館所蔵資料は「元文改元六月朔門人新川平元成謹書」の序、「寶永己丑春二月越中南景衡艸壽撰于東都旅館」の叙、「享保七年壬寅下元之日 水戸府下澹口齋安積覺跋」の跋文がある。また、『集古図説』には享保20年（1735）の三好文政の序、正徳5年（1715）の白石の序、新川元成の跋がある（三好の序の途中に白石の序が挟まれており、乱丁となっている）。

■ 作者

作者は新井白石。本名は君美で、白石は雅号である。上総国久留里藩主の家臣の子として生まれた。若いころは2度の浪人生活を経験するなど苦勞し、



[395/2]

ほとんど独学で学んだが、30歳ころ木下順庵の門に入り、頭角を現した。順庵の推挙により甲府藩主徳川綱豊（のちの六代将軍家宣）の侍講となった。将軍家宣が理想的の君主となることを願い、19年間に1299日にも及ぶ講義を行っている。

家宣が将軍となると、その子家継が将軍となった後まで幕府政治上に積極的に参画した。享保元年（1716）徳川吉宗が将軍となると政治上の地位を失い、不遇のうちに著述にはげんだが、享保10年（1725）に69歳で亡くなった。

その著作は多岐におよび『藩翰譜』、『西洋紀聞』、『折たく柴の記』等があるが、著作の多くは在世中にはほとんど公刊されず、広く読まれるには至らなかったため、当時は、学者としてよりもむしろ詩人として有名だった。



本文を読む

< 翻刻 >

「本朝軍器考」（『新井白石全集』第6巻 市島謙吉編 吉川半七 1907）

[081.5/5/6]

「本朝軍器考」（『増訂故実叢書』第34巻 今泉定介編 吉川弘文館 1929）

[210.09/1/34]



参考文献

石村定吉「本朝軍器考と愚得随筆」（『武器甲冑之研究』雄山閣編輯局編 雄山閣 1941）

※当館未所蔵 国立国会図書館デジタルコレクション（デジタル送信）で閲覧可能

「古書への手引き 本朝軍器考」（『歴史読本』15(4) 新人物往来社 1970

[Z210/508]

荒川久寿男「本朝軍器考」小攷（『新井白石の学問思想の研究』荒川久寿男 皇学館大学出版部 1987） ※当館未所蔵